
契約の代価外伝 - 紅い薔薇と白い薔薇 -

織田撫子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

契約の代価外伝 - 紅い薔薇と白い薔薇 -

【Nコード】

N9594V

【作者名】

織田撫子

【あらすじ】

契約の代価番外編。ミラー力過去編です。

第1話 スカーレット

例えるなら、それは紅い薔薇のようだった。鋭い棘とさらには毒すらも持ち合わせていそうな艶やかで鮮やかな紅い薔薇。

それが私の母と言う人だった。

子供の私の目から見ても母は美しい人だった。白くて滑らかな肌、ストロベリーブロンドのウェーブがかった艶のある長い髪、くつきりした顔立ちに映える大きなとび色の瞳、細い四肢と反して女性的なラインの体躯。

そんな美しい母と生き写しだと言われ、エリザベートが紅い薔薇なら、お前は白い薔薇だね、と喻えられることが、とても嬉しかった。

母はいつも夜に咲く大輪の薔薇だった。どのパーティーに行ってもいつも注目の的。その度に私と父は鼻高々で、父が母を妻に迎え自分がこの世に生を受けたことを感謝するほどに、自慢の母だった。

でも、12歳になって一際母に似てきたと持て囃されて喜んでいたのも束の間、父の様子がおかしい事に気付いた。

「お父様、どうなさったの？ 最近ずっと元気がないわ。誰かに嫌なことを言われたの？」

いつもは朗らかだった父がその頃毎日沈んだように浮かない顔をしていた。また意地悪な侯爵に文句でも言われたのかと心配して声をかけると、父は顔を上げて溜息を吐いた。

「お前はエリザベートに生き写しだな。どうか、お前はエリザベートの様になるな。お前は白いままでいるんだよ」

父の言った言葉の意味は、全く理解できなかった。私も父もそれほど愛して自慢に思っているのに、父は母を拒絶している。

不思議に思い首を傾げる私に、父はそれ以上何も言わなかった。

でも、ある日メイド達の会話が耳に飛び込んできた。

「エリザベート様は、フェルデン侯爵と不倫している」

「フェルデン侯爵のお子を身ごもっておられる」

母の裏切りを、知った。

問い詰めようと、母の部屋に行くと、母と父が話をしている最中だった。興奮していた私はそれを気に留めることなく、母に詰め寄った。

「お母様、どういうことですか？ メイド達の話の聞きました。お母様は、私とお父様を裏切る気ですか？」

必死に涙をこらえながら詰問する私に、母は優しく微笑んで答え

た。

「ごめんね、マルシラ。お母様ね、あなたとお父様より大事な人ができちゃったの」

いつものように美しく微笑んで、母は幸せそうにお腹を撫でた。その母の笑顔に、私は生まれて初めて憎しみを覚えた。

「お母様はバートリー家の伯爵夫人でありながら不貞を働くとは、恥ずかしくはないのですか！ お父様と私をなんだと思っているのですか！」

とうとうこらえきれずに、涙は堰を切る。そんな私の顔を見ながら、なおも母は笑顔を崩さない。

「なにかしらね？ 今はもう、なんでもないわ」

目の前で微笑む美しい女は、既に私の母ではなかった。毒婦

。今の母に似あいの言葉。母の様になるな、そう言った父の言葉をようやく理解した。

「お母様、あなた酷い人だわ。私とお父様はお母様をとても大事に思っ、愛しているのに、なぜそんな酷い事を言うの？」

「仕方がないわ。だって私、お父様もあなたも愛してないんだもの。今は別の人を愛しているし、愛している人の間に生まれてくる子供

を愛しているんだもの」

これ以上言葉を重ねても、いたずらに傷つけられるだけだと思っ
た。本当に終わってしまったのだと悟った。この人にもう、私と父
は必要ない、この人のとび色の目には私達がもう映されることはな
い。そう、悟った。

「エリザベート、お前は女である以上に、伯爵夫人としての義務と
マルシラの母であるという責務を果たさなければならぬ。お前が
どれだけ放蕩しようとも、不貞を働こうとも構わないが、それだけ
は忘れてくれるな」

涙に暮れる私を父は優しく抱きしめて、そう母に向けて冷たく言
い放ち、私を連れて母の部屋から退室した。

その後、母は何度も父に離婚を迫った。その度に父は怒り母はヒ
ステリーを起こし、交渉は決着を見ることはなく、憔悴していく父
を宥める毎日だった。

日ごと憔悴し、やつれていく父の姿を見るのが悲しかった。朗ら
かでおおらかだった父は今は見る影もない。母の非道な仕打ちに耐
え難きを耐え、それでも私の為に私の前では笑顔を取り繕おうとす
る父が悲しかった。

父をそんな風に変えてしまった母を許せなかった。

でも、そんな母を許せなかったのはやはり私以上に父であつて、そんな毎日にストレスと憎悪をため込んでいた父はある夜、とうとうその黒く淀んだ感情を爆発させた。

もう、その頃の父は父ではなかった。精神の破壊を止める為なのか、毎日浴びる様に酒を飲み、その為により一層精神は破壊されていた。

その夜、いつもより遅く帰宅した父は、すつきりとした表情をしていた。父が纏っていたのは、憑き物が落ちたかのような表情だけではなく、上等なビロードの、朝はダークグレーだったはずの赤黒く染まった外套。

その日父は、母と侯爵の同衾の現場に乗り込んで、母と侯爵を殺した。

父の告白に、頭が真っ白になった。喜ばいいのか悲しめばいいのか、子供の私にはわからずに、ただ、父の所業が恐ろしかった。父にそこまでさせてしまった母と、父を止められなかった自分に憤りを感じた。

「心配することはないマルシラ。貴族は殺人を犯しても罪に問われることはない。これからはずっと二人で幸せに生きていけるよ。もう、私達を悩ませるものは何もないのだから」

父の笑顔に涙が零れた。父は、可哀想な人だ。私と自分の矜持を守るために、愛した女性でさえも屠った。可哀想なお父様。私が父を守らなければ、きっと壊れてしまう。

父を抱きしめて、お父様をずっとずっと、私が守らなきゃ。そう誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9594v/>

契約の代価外伝 - 紅い薔薇と白い薔薇 -

2011年11月16日22時54分発行